

新会長に聞く

飯吉透さん

(CIEC 会長 / 京都大学学術情報メディアセンター教授) に聞く



2024年8月のCIEC会員総会にて、新しい執行部が発足し、飯吉透先生が新会長に選出されました。本誌では、新体制になる時、新しく会長になられた方にインタビューをお願いしております（前会長の若林先生へのインタビューは本誌の第45巻に掲載されています）。飯吉先生に、教育工学との出会い、その後のご研究、CIECの役割についてうかがいました。

インタビュアー：CIEC 会誌編集長 寺尾敦（青山学院大学）

教育工学との出会い

寺尾 先生のご経歴をあまりご存じない会員もおられるかと思しますので、先生のご経歴から始めたいと思います。学部は国際基督教大学ですね。それから同大学の大学院に進学されています。リサーチマップによれば、このときの研究分野は教育工学とのことですね。

飯吉 そうです。ICU（国際基督教大学）は、今でもそうですけれども、入学したときに教養学部しかない、いわゆるリベラル・アーツの大学でした。学部はひとつしかなくて、その中にいくつかの学科がありました。私は最初、理学科だったのです。専攻は物理でした。大学に入るときに理系か文系かを決めかねていて、両方できるようなところということで、リベラル・アーツに落ち着いたのだと思います。

それで、理学科に入ったものの、非常に不勉強な学生というか、遊んでばかりいたので、やはり面白くないし、とても4年間、自分が物理でやっていけるとは思えない。悶々としていた大学1年の夏に、当時はインターネットもない時代ですから、ICUの図書館の中を「何か面白いものはないのかな」と放浪していました。

そうしたら、『教育工学』という雑誌があって。今の日本教育工学会ですね。日本教育工学会の学会誌とアメリカの教育工学会の学会誌を見ていて「これは面白そうだ」と。コンピュータには中学のころからずっと傾倒していました。いわゆるマイコンというやつですね。自分

で作ったり、いろいろとつなげて動かしたりすることが好きでした。これらの雑誌を見つけて、理系と文系を合わせたような学問があるのだと知りました。教育という非常に人間くさいものと、最新のコンピュータをつなげるという。雑誌を見ていたら、学会の理事にICUの先生が数人おられることがわかりました。

当時、教育工学はアメリカでは盛んでしたが、日本では、東はICU、西は大阪大学ぐらいしかきちんと教えているところがなかったですね。幸いICUに専門の先生方がたまたま数人おられて、研究室もありました。僕はそのようなときの行動は早いものですから、すぐ門戸をたたいて「こっちに行きたいんだ」ということで、2年に上がるときに転科しました。学科を変えられる制度ですね。それから教育工学です。

学部は教育工学専攻で卒業研究をして、修士課程もICUで、博士課程に進学しました。当時ご指導いただいていたのが、京都大学の学部と修士課程を出られて、インディアナ大学で博士号を取られた中野照海先生という方だったので、彼が素晴らしい大型の仕事をいろいろ持ってきてくれたのです。それが楽しくて、システム開発やハイパーメディアの開発などにいろいろと携わりました。研究というよりは開発・評価の方に興味が行く中で、博士の研究が進まないということで、本気で博士論文を落ち着いて書くのであればアメリカに行った方がいいのではないかと、2年目ぐらいで中野先生から言われて、アメリカに留学しました。もう少し早く言ってくれてもよかったのですが（笑）、いろいろな経験

は積めたのでありがたかったですね。NHK と日本初のハイパーメディアの教材を作ったりしたことは、人生において、研究者として非常に重要なきっかけになっているなど、後になって思います。

寺尾 アメリカでの留学先はフロリダ州立大学ですね。

飯吉 そうです。日本にインストラクショナルデザインを普及させた始祖的な立役者である鈴木克明先生が、ICU 出身で、フロリダ州立大学で学位を取得されています。僕とはまったく重なっていないので、バーチャルな先輩というか、直接に先輩・後輩の関係だったことはないのですけれども、たまたま同じコースなのです。彼はたぶん、インストラクショナルデザインをしっかり学ぼうと思って、ガニエという大学者が作られた学科で学ばれました。私も同じところに行ったのですけれども、僕の場合は、もともとコンピュータやマルチメディアなどをやりたくて、日本でもそのようなことをずっとやってきました。ただ、自分には基礎が足りないと思ったのです。研究の基礎部分というか、理論のところですね。テクノロジーを使った応用というよりは、むしろ基礎をしっかり学べるところだということで、フロリダ州立大学を留学先に選びました。

僕はインストラクショナルデザインのトレーニングは受けているわけですが、直系の後継者とはなっていません。自分の中に知識としてはあるわけで、役にも立っていますが。あらかじめデザインされた形で学ぶというよりは、自由に学んでいく中で、人間がどのような環境で、どのような刺激を受けて、どのように学んでいくのかという方に引かれていきました。

寺尾 フロリダ州立大学で学位を取られてから、かなり

長くアメリカで研究生生活を送っておられますね。

飯吉 アメリカでの生活が意外になじんで楽しく、できればもう少しアメリカにいたいと思いました。それならば仕事をしなければいけない、まずは大学の研究者の職ということで、いろいろと応募しました。

僕のメンターのマイケル・ハナフィンという先生はフロリダ州立大学の教授だったのですが、私が学位を取る前にジョージア大学に移られて、そこで教育工学の研究所の所長になりました。私はその研究所で、博士論文を書きながら、研究開発マネジャーの仕事をしていました。学位取得後も、ポスドク研究員のような形で、そこに1年ほどいました。

いよいよ「巣立ちしないとだめだよ」と言われて、いろいろなポストに応募しました。当時、留学生がアメリカの大学でファカルティのポジションをとることはなかなか大変でした。いくつか面接もした中で、UC バークレーに、昔、日本でお会いしたことのあるマーシャ・リンという科学教育・教育工学の先生がおられて、その研究グループと親交があり、ポスドクで来ないかという話をいただきました。

そこに決めかけていたところへ、カーネギー財団で新たなことを始めるようだからということで募集が出ていて、それが知識メディアラボを作るという話だったので。カーネギー財団もよくわからなければ、知識メディアラボでいったいなにをやるのかもよくわからないまま、わからないものには興味があるので応募してみました。とんとん拍子に面接までいきました。当時は Zoom などなく、南部のジョージアから西海岸のスタンフォードに同財団は移ったばかりだったのですけれども、カーネギー財団が飛行機代と宿泊代を出してくれて、現地面接に行きました。理事長のリー・シュルマンという教育学の大家や、他の主要なメンバーと面接をしたら、「君、面白いからおいでよ」と、意外にもあっさり決まりました。

ジョージア大学やフロリダ州立大学の同僚の先生たちはみんな驚いて、まず言われたことは「もたないぞ」でした。半年もたないだろうと言われて、「どういうことだ」とたずねたら、やはりレベルがまったく違うし、考え方も違うからということでした。だけれども、一応ご縁があったのだからお世話になろうと思って、そのときは子どももいたのですが、大移動しました。

寺尾 そのような経緯だったのですね、運命や縁を感じます。カーネギー財団での最初の肩書は上級研究員です



ね。

飯吉 はい。知識メディアラボの立ち上げの、特に技術的なことを担当するディレクターでした。やることがたくさんありました。

寺尾 「メディアラボ」はかなり広い範囲をカバーする名前ですね。MITにもありますね。

飯吉 MITのメディアラボは、それこそいろいろとやっています。メディアというものがそもそも広すぎるといふか、MITのメディアラボは、教育だけでなく、社会的に役立つあらゆる発明といふか、システムを作っていくということですね。

カーネギー財団は教育に特化した財団です。知識メディアラボの理事長になったばかりの、スタンフォードの教授でアメリカ教育学会の会長も務めたリー・シュルマンという人の新構想として、Scholarship of Teaching and Learning, SoTL というものがありました。先生たちがどのように教育をよくしていくかを考えるときに、自分で理解している経験知のようなものもあれば、いわゆる暗黙知と言われるような、無自覚の達人の技のようなものもあります。当時、インターネットもようやくフル稼働し始めて、みんなが使うようになり、デジタルメディアが非常に扱いやすくなっていきました。音声や映像などがフルに使えるようになっていく中で、今までは文字中心に伝達・継承・蓄積されていた「知識」を、もっと他メディアに広げて、先生方が教育の実践知を可視化・共有して、お互いに切磋琢磨して、コミュニティとしてみんなで高めて蓄積していこうというのが、SoTLの基本的な考え方です。そのために知識メディアラボを作りたいとリー・シュルマンに言われて、「いろいろなツールやシステムを開発せよ」と指示されました。まずは高等教育から始めて、初等・中等の先生まで広げながら、壮大な教えの知識ベースといえますか、今でいえばSNS的な、みんなで共有して学びあっていく、研鑽しあっていくものを作ろうという構想でした。奇妙と言えば奇妙な名前ですが、自分たちも含めて、なぜこれが「知識メディアラボ」なのかよくわからないところがありますが、educational knowledge, pedagogical knowledgeと言われるような領域を扱っています。こうした知識をメディアでわかりやすく可視化して、共有できるようにしようという野心的試みです。積み重ねて、少しずつ互いから学びあいながら、教育をよくしていこう、授業をよくしていこうということです。

寺尾 なるほど。2012年のPCカンファレンスの基調講演で、飯吉先生がオープンエデュケーションについてお話をされました。オープンエデュケーションの3要素のひとつがオープンナレッジですね。SoTLはそこに関係しているように思います。

飯吉 当時、教育界でも「そんなことができるのかね」というものに取り組み始めている中で、2001年にMITがオープンコースウェアを立ち上げました。当時MITでは2,000近くの科目が教えられていました。シラバスや教材、それから、授業のビデオがようやくYouTubeなどで配信できるようになってきたので、そのようなシステムを使って、どんどん広く無償で公開していこうとしました。アメリカでは、私立大学に4年間子どもを行かせると学費が2,000万は超え、とても高額だったわけですが、それをインターネットで広く無償で公開するという革命的なことを始めたわけです。教育ではもちろんオープンエデュケーションは革命的だったのですが、オープンリサーチ、オープンサイエンス、オープンソースなど、いろいろなオープンな革命が同時多発的に起きました。

オープンエデュケーションの大きな起爆剤のひとつになったオープンコースウェアですが、先生方が作った教材や、授業のビデオは公開されているのですけれども、それをそのまま使ってMIT以外の学生が本当によく学べるのか、他大学の先生たちが使いこなせるのかという問題がありました。MITの先生の経験知や、暗黙的な実践知のようなものは公開されていないわけです。やはり授業ビデオや教材などの表層的なところしか取ってこれられないという問題があるので、知識メディアラボでやっていることはオープンエデュケーションに寄与できるのではないかと考えました。

テクノロジーの部分、つまり、システム、プラットフォーム、ツールをオープン化するということが、教育で起こってきたことのひとつ。もうひとつはオープンコンテンツですね。Open Educational Resourcesという言い方もありますが、オープンコースウェアに代表されるように、授業コンテンツや教材コンテンツを公開していく。これら2つの大きな柱に加えて、せっかくカーネギー財団でこのような仕事をしているのだから、知識の部分であるオープンナレッジを3本目の柱として立てれば、テクノロジーやコンテンツがより発展し改良され、よく使われていくことに寄与できるのではないかと考えました。

オープンナレッジ

寺尾 オープンエデュケーションの3要素のお話をPCカンファレンスの基調講演でうかがったときに、コンテンツやテクノロジーは比較的共有ができるのかもしれないけれども、ナレッジの共有はかなり難しいのだろうという印象を受けた覚えがあります。

飯吉 おっしゃるとおりですね。それは、ナレッジをどのような形で共有すればいいのか定まっていなからです。何をどの程度共有すれば伝わるのかということもわかっていない。たとえば、先生が長年教えられている授業で、自分ではもう染みついて、「ここは、こういうふうに教えると、学生はよくわかる」ということがわかっている。しかし、似たような科目をどこかの大学で教えられている先生たちにそれを伝えようとしても、使っている教材が違ったり、教え方のスタイルが違ったり、いろいろな違いがあって、長年培ってきた職人的な技をどのように伝えればよいかということは、実はご本人が考えてもよくわからないのですね。

オープンテクノロジーやオープンコンテンツの部分は、必ずしもみんな考えられなくても、作り手や提供者がどんどん出していけば自然に広まって使われていくものであるのに対して、ナレッジの部分は、ナレッジのクリエイターとユーザーの双方がいろいろと考えていかなければいけない。どのあたりに落としどころを作っていくのかということも、双方の当事者どうしが見極めていかなければいけないので、ややこしいところですね。しかし、私はそこがやはり面白いところだなと思います。非常に人間的というか、やりがいがありますね。

CIECの役割

寺尾 学会のホームページに先生からの会長就任時のメッセージがあります。その中で、CIECという学会の役割を「ボトムアップに生まれ育ち続ける教育イノベーション」と書かれています。オープンナレッジは一人一人がいろいろな実践をやって蓄積してきたものを共有しようという仕組みなので、ここでおっしゃっている学会の役割は、オープンナレッジを学会の中で作り上げていくという意図だと理解してよろしいのでしょうか。

飯吉 おっしゃるとおりです。CIECは、もともと実践を共有するコミュニティとしてスタートしたという経緯が30年前にあって、それがPCカンファレンスという場だったと思います。特にインターネット前の時代を考

えると、コンピュータは非常にまだ原初的で、8ビット時代からの進化もそれほど速くはなく、今から振り返れば性能も非常に低く、最初は8色しか出ないコンピュータから始まって、いろいろな苦労があったわけです。そのようなテクノロジーの限界があったからこそ、ある意味でじっくり研究ができた。理論的なことをあだこうだ言いながら、それをまだまだ幼少期に近かったコンピュータに乗せて、いろいろな実験をしていたことが多かったと思うのです。

ところが、この30年間で起きたこと、特にインターネットが普及した90年代後半以降に起きたことを振り返ってみると、いろいろなツールやプラットフォームが日進月歩でどんどん出てくる中で、じっくり研究が進められないというか、追いつけなくなってきているということがあるのではないかと思います。そこで、理論的なものを体系的に進めていくことを諦めてはいけないのですけれども、やはり大事なことは、いま現場で起こっていること、現場で面白いツールが出てきた、面白いデバイスが出てきた、先生たちがこのように使ってみてこのような変化があった、このようなことがわかったというようなことです。いわゆる研究や理論として結晶化する前に、こうしたことをどれだけ素早く広範にみんなに伝達して、共有して、いいところを学びあっていくか。これが同時にあちらこちらで、いろいろなツールやテクノロジーを使って起こっているというボトムアップが、非常に大事なのではないかと思います。

テクノロジーが非常に限られていて、進化も遅かった時代には、トップダウンで「こういうことをすれば、教育においてコンピュータを効果的に使える」という理論的なものや研究的な部分が、ある意味でリードしていた時代だと思うのです。それがいま、非常に難しくなってきました。ある意味で教育工学という学問の危機だとも思っています。そのような中で、CIECが生まれたときからやってきた実践コミュニティ的なスタイルで、みんなで走りながら考えていく、共有していくということは、非常に価値があるのではないかと、役に立つのではないかと思っています。

寺尾 今のようにテクノロジーの進化が激しい時代は、教育だけではないですけれども、テクノロジーが先に物事を動かしてしまう側面がありますね。まだよくわからないのだけれども、とにかく走りながら考えて、ボトムアップに積み上げていくことをするしかありません。単純に「新しいものが出てきたから使おう」ではよくない気がします。使ってみないと気がつかないこともありま

す。ここはバランスが難しいと感じています。

飯吉 学会としては、中長期的に何が大事なのかという、大きな森の部分を見失わないようにすること、さらに、みんなが共有できる「こういうものを追求していくのはいいよね」という価値や理念を見える化していくことが大事なのではないかと思います。いま言われたように、新しいものが出てくるとみんなが飛びついて、少しやってみて、「おおっ」となります。いま AI がそのような状態だと思うのですが、けっきょく自分は何をしようとしているのか五里霧中です。いろいろなものがこれまでも出てきて、これから出てくる中で、「学びをどのようにするのか」という大きな部分をしっかり持っていれば、それにあわせて「どういうふうに使えるんだろう」と、価値や理念に吸着させながら使っていけると思っています。そうしないと、次から次に来る波に飛び乗ってサーフィンをしているようで、自分のカラーのようなものが残せなくなってきて、研究者としては非常に危機的です。みんな似たような金太郎あめ的な感じになってしまうし、非常に単発的な、短距離走的なものの積み重ねで、とにかく走り続けてはいたけれども、いったい何に向かって走っていたのかよくわからない、ということになってしまいます。

今回の PC カンファレンスの基調講演（これからの教育・学習イノベーションを展望する —教育格差の超越を目指して—）やテーマ（より良い世界のための新たな教育を目指して）も、そのあたりの模索が大事なのではないかという趣旨ですね。教育はそもそも、一人一人が幸せになる、世界が幸せになるためのものです。本当に幸せな世界は、価値は多様ですが、それぞれにとって少しでもいい世界になっていくという目標は漠然と共有できるわけです。その中で、テクノロジーをどのように使っていけば学びや教育がよりよくなっていくのか、もう一度考えるべき時代ではないかという提起ですね。

寺尾 コアになるものを持ちながら学習環境の新しい急激な変化に対応していくとき、そのコアになるものは、私はやはり学習者個人ではないかと思います。人が使う道具のデザインの研究をしていたドナルド・ノーマンが、「テクノロジーは変わるけれども、人間は変わらない」ということを述べています。これは教育にもあてはまるでしょうね。どのようにすれば学習者が学ぶことができるのかということは、脳は変わっていないのですから、それほど大きくは変わらないだろうと思います。

学習者を幸せにする

飯吉 そうですね。ドナルド・ノーマンが言っていたことのひとつに、最良のツールやテクノロジーはトランスペアレントになるということがありました。それがまさにいま起こっていることです。昔は、テープレコーダーから、大掛かりなものでは LL 教室まで、いろいろとそろえなければ始まらなかったわけです。いまは基本的にスマートフォン 1 台の中に様々なものがすべて詰め込まれています。スマホさえあれば、あとは透明で、多種多様なツールが使えるような時代に入ってきていて、デバイスの存在感は非常に薄くなってきています。

そのような中で学習者をハッピーにするために、ここ 30 年ぐらい明確に自分がコアで追求していることは、より多様な学びです。オープンエデュケーションがその発端だと思うのですが、誰でも、いつでも、どこでも好きなものを学べるという、まずは環境の部分ですね。そのような学習環境を整えて、それを進歩させることがひとつ。もうひとつは、AI が最たるものかもしれませんが、学習支援です。自分のラーニングパートナーでもいいかもしれないですが、個々の学習者のニーズに応じて自分をパワーアップする、自分の認知能力や知的能力をパワーアップすることです。つまり、いろいろなところでいろいろな学びができる、そこに乗り込んでいけるという環境の側と、学習能力を高めていくという個人の側です。まさに AI につながっていく部分があるのですが、AI に脳を吸い取られたり、自分の頭に AI を入れてしまうのではなく、AI を併用していくことで、自分の脳で限界があった部分をどんどん拡張して、学ぶ能力を高めていく。環境と学習者の両側で、教育においてテクノロジーを使っていくことが、私のやりたいことだとずいぶん前に気づきました。そこからは、何が来ても怖くないというか、どのような新しいツールやテクノロジーが出てきても、そこにどのように合わせられるのかという視点から捉えていくようにすると、わりとすんなり自分では腑に落ちて、いろいろと考えていけるし、やりたい研究や開発を決めていけるかなという感じですね。

新たな格差

寺尾 AI もオープンエデュケーションも、一人一人の学習者の多様なニーズや特性に添えていくことのできる学習環境だと思います。先生が 2012 年頃に初めて PC カンファレンスで基調講演をされたときが、CIEC と先生との関わりができた最初のことでしょうか。

飯吉 そうですね。震災があったのが2011年で、2012年の1月に帰国しました。京大でPCカンファレンスがあるということで、知り合いの京大の先生たちから「基調講演をやってくれないか」とご依頼いただいたことを覚えています。それまでは、恥ずかしながらPCカンファレンスすら知らなかったので、なぜいま自分がCIECの会長になっているのか、夢のような話ではありますけれども、そのようなご縁でした。

寺尾 その基調講演で先生は、格差を超える装置としてのオープンエデュケーションというお話をされていました。「情熱増幅装置」という言葉もありました。家庭環境の格差や、地方と都市部の格差があり、そう簡単に解消できないけれども、格差を超えていける装置としてのオンラインエデュケーションやオープンエデュケーションという位置づけですね。今年の先生の講演でも話されていたと思います。

いま、誰でも好きなように勉強するためのリソースはたくさんあって、ほとんどお金をかけずに学べます。しかし、現実には学力の格差があります。オープンエデュケーションなどの環境が整うことが、かえって格差を広げるという主張をする人たちもいますね。

飯吉 地方や都市部、世帯の収入といった格差問題はもちろんあるのですが、一方で、たとえば非常に裕福な家庭で育った人たちが行っている大学で、なかなか学生がやる気にならないと耳にすることがあります。好きなことがあまり見つからないし、やることを提案してみてもあまり乗ってこない。非常に恵まれた環境で生まれ育ってきた人たちが、必ずしも学ぶことに関して積極的ではない。これは、情熱の有無や、最近の「やる気格差」と呼ばれる部分かもしれません。

実はここが一番難問ですね。ベーシックインカムは社会に近いのですが、「みんな働かなくていいのであれば誰が働く気になるのか」という話に近くなってきて、「ウィキペディアとAIがあれば、別にいいんじゃないの」というような話ですね。一生懸命学ぶ必要はないのではないかと、みんなが思い始めている。「教育のベーシックインカム化」という感じなのかもしれませんが、よくできた、自律的に動けるAIのようなツールが出てきてしまったがために、自分たちがあくせく考えたり、学んだりしなくてもいいのではないかという人が、これからどんどん増えていくのではないかと思います。

そうすると、大学の先生の仕事は本当に大変で、「別

にいいじゃない、先生。これでできるんだから。先生だって、レポートを僕が書いたか、AIが書いたか、区別つかないでしょう」と言われれば、まさにそのとおりなのです。先生という職業がいつまでこの形でもつのか、非常に不安定な状況だと思います。

皮肉なことに、格差をなくしていくために、テクノロジーやツール、プラットフォームを充実させてきた側面があったのに、そのようなものが充実すれば充実するほど、新たな、本質的に非常に解決しにくい格差が生まれてしまっているというジレンマがあるのですね。ここをどうしなければいけないのかというところでですね。

難しいし、面白いところでもあるし、教育だけの問題ではなくて、これからの社会の問題だとは思いますが、生きがいや自分のやりがいをどこに見つけていくのか。目標が固定されて、そこが揺るがないものであれば、仕事でも学びでもやりやすい。受験勉強もそれに近い形だったと思うのですけれども、そのような形態が崩れていく中で、いったい何をめがけて、自分でわくわくしながら猛ダッシュして学んでいけるのかということが、なかなか見つからなくなっている感じはありますね。

寺尾 そうですね。そこは難しくなっていると思います。私は、3年生から始まるゼミナールの募集の条件に、「学習は面白いものです。そう思えない人は応募できません」ということを書いているのですが、あまり理解されていないようです。テストでよい点数を取れたときには「やった」と思うけれども、学習そのものが面白いと感じる経験は、あまり豊富ではないようです。

飯吉 特に日本の場合は、自由度が低いというか、先生にしても、初等・中等教育ではやはり決められたカリキュラムの中で教えている。多少の創意工夫はできるけれども大枠は変えられない。学ぶ側としては、決められたことをできるだけ完全に、試験の点数を取れるように頑張ることに専念させられてきた部分があって、そもそもそれは面白くない。人が決めた内容、人が決めたゴール、人が決めたやり方で、タイミングもすべて「これは高校2年で学ぶ内容」と決められてやってきたので、その中で学びが面白いと感じられる人は非常に少ないはずですよ。

ただ、おそらく先生が言われていることは、知的好奇心のようなことであるので、必ずしも学校的な勉強ではないですね。そこがわかれば、学校とは関係がないところで学ぶ面白さというものは、みんな何かしら体験して

いるはずですが。そのようなものに、大学のゼミの学び、自分の研究なりを、どのように引きつけていけるのかというところが大事ですね。

自分の好きなことを突き詰めてやっていくことや、「好きなことはこれだから、ちょっとやってみます」ということも、非常にやりやすくなる。ウィキペディアとAIを使ってみんなが似たようなものを持ってきて、「だいたいわかりました」ということでは、非常に個性がないというか、みんな似たり寄ったりのものになりがちです。深くディープダイブしていくようなことが可能なのに、そこまでいかないうちに満腹になってしまうというか、「こんなものでいいかな」という満足感が得やすい時代になってきて、これは怖いですね。

あるものに、「手が届かないから、わからないから、すぐ手に入らないから」、妄想したり、それに対して情熱や憧れがどんどん大きくなっていったりということがあると思うのですが、それにすぐアクセスできてしまうところ、そのような気持ちを沸き立たせていくことに対して、ネガティブに働く側面ですね。外国に行くことが夢だという時代に、図書館や本屋に行ってその国のことについて学んで、「へえ、こういうところがあるんだ」と。それが間違っていることも多々あるのですが、それも含めて、妄想のようなところで気持ちを高めていくことがあったのではないかと思うのです。学びにもよく似たところがあって、図書館に行って1冊の本に出合ったときの感動のようなものは、非常にリソースが限られていた時代、アクセスしにくかった時代だからこそ、人間の内発的な欲求、知識に対する欲求が高まることに役に立ってきたのかもしれない。いま、そのような意味で「圧がない状態」で、どのように圧を人工的に作っていくのか、内発的に作っていくのかということは、非常に大変ですが重要だと思います。

CIECでPCカンファレンスなどに来られているのは、やはり熱い先生が多いですね。私は、これは今としては宝だと思っています。激しい、ある部分では狂気にも似たような情熱を持って、他人にきちんと伝わっているかどうかは別としても、それを伝えたいという気持ちが前に立って、このような場でそれを発表したりする人がいるということは、非常に大事なのではないか。それを他の先生が見て、自分としてはついていけないけれども、「すごいな、この人は」と思う。そのような先生たちを学生が見ると、やはり「これはすごいぞ」と思う。こう

した意味では、学生さんにもCIECにもっと来ていただきたいと思います。CIECが熱さだけで進んでいるとは思わないですけども、少なくともそのようなよさというか、学会というよりも実践コミュニティですね。熱さを伴ったコミュニティです。私としては、もちろん共感はできますし、尊敬できる部分だと思います。そのようなところで貢献せよという立場に置かせていただいているので、よいところをさらに高めていけるように、何ができるのか、会員の皆さんや、執行部、理事会、委員会のみなさんといろいろと考えて、楽しく進んでいければと考えています。

おわりに

寺尾 ちょうど1時間ぐらいお話をうかがいました。何かこのインタビューで先生がおっしゃっておきたいことが他にございましたら、どうぞお願いします。

飯吉 ひとつは、会員数という生々しい話になりますが、参加している人の数が増えれば増えるほど多様性は広がっていきますから、そこはできるだけ、このようなコミュニティだからこそ、お仲間をどんどん呼び込んでいただきたいということはありません。

もうひとつは、多様な、いろいろなことをやっている人たちが来るコミュニティは、必ずしも自分がすぐに理解できるようなことばかりではないと思うのです。人の発表を聴いたりしていてもそうです。いま傾聴ははやっていますけれども、そこはコミュニティの一員として、まずは分かろうとして、じっくり学ぶ姿勢を持ちたいですね。もちろん発信する姿勢は学会には大事なわけですが、そこに来てじっくり学ぶ姿勢も大事だと思います。「自分はいま、発信はできないけれども、学びたい」という人たちに、たくさん参加していただきたいです。

そして、そのような人たちが、熱い先生たちがいろいろなことをやっていることに感化されて、自分も何か始めてみたいという気持ちになれば、まさにそれがCIECの役割というか、そのような場なのではないかと思っています。是非そのような形で、まずはお仲間を増やしていく。それから、増えていくお仲間を、お互いにリスペクトしながら、謙虚に学び合い、お互い高めていく姿勢を大事にしていきたいと思います。みなさんお分かりのことだと思いますけれども、そうすれば、CIECは自然に、より元気になっていくのではないかと思います。

寺尾 本日はインタビューをありがとうございました。